

それは避けられない。退屈は単純ではない。我々は（仕事やテキストを前にして）苛立ちや拒絶の身振りで退屈から逃れられるものではない。テキストの快樂があらゆる間接的な生産を想定するのと同じようには、退屈はどんな形であれ自発性を発揮する権利があるものだと考えられない。誠実な退屈などは存在しない。もしもおしゃべりのテキストが私を個人的に退屈させるのなら、それは実のところ相手の要求が気に入らないからだ。しかし、私が本当はそれを好きだとしたら（私にいくら母性的な嗜好があるとしたら）？ 退屈は至福とかけ離れてはいない。それは快樂の岸辺から眺めた至福なのである。

ロラン・バルト『テキストの楽しみ』（訳注・鈴木和成訳「みすず書房」を参照した）

序

ある程度の退屈は幸福な生活に不可欠である。

バートランド・ラッセル『ラッセル幸福論』（一九三〇年）

一九九九年、イギリス人写真家のマーティン・パーが出版した本は、予想外の売れ行きを見せ、コーヒーテーブルや机の上に欠かせないものとなった。この『退屈な絵葉書』という本の中身は、まさにタイトルが約束するものである——イギリスの生活において想像し得る限り最も退屈な景色や局面を捉えた絵葉書の分厚いアルバム^{*1}。パーが個人的に集めた絵葉書から一六〇枚を選んで作り上げたものだ。何の面白みもない鉄道駅、煉瓦^{れんが}で建てられた工場、がらんとしたインテリア、モーターの部屋、ホテルのラウンジ、悲しげな郵便局、そして佻^{わひ}しく広がり延びていく高速道路——こういったものが、この平凡で味気のないものを讃^{たた}える奇妙な本のかに場を見出した^{みいだ}。多くの人たちがこの本を愉快だと思ひ、ある人たちは悲しいと考えた。誰

もこれを退屈だとは思わなかったようだった——実のところ、その正反対だった。

それでも、『退屈な絵葉書』に収められた写真に写っているものは、日常生活における目的を果たすのにどれだけ有用であろうと、間違いなく退屈な景色や取るに足らぬ建造物である。私にとって——ほかの多くの人たちにとってと同様に——この本は啓示的であると同時に親しみ深いものであった。ジャンクアート、あるいは平凡なものを美的な目的に使った芸術の多くの例と同じように、それはアーサー・ダントーが「ありふれたものの変容」と呼ぶものを示したのだ。私たちは築かれた環境の多くにつきまとう陳腐さを見出すとともに、つながりとコミユニケーションを求める我々の欲求の切実さにも気づく。どうして駐車場や高速道路の入り口を絵葉書の題材として選ぶ人がいるのだろうか？ 私たちはそう問わずにいられない。こうした写真に人間が写っている場合もあるが、多くは生命の痕跡がなく、核爆発後のように何も無い日常の景色である。取るに足らない画像の位置転換によって、当たり前でありながらも深い憧れに明るい光を当てるといった「フォークフォトグラフィ」の流行の観念をもてあそんでいるにせよ、それが映し出しているのは日常生活の退屈さにすぎない。パーはコメントも理論も付け加えず、ただ写真が自ら語るに任せている。

パーがその続編であるアメリカの絵葉書の本（『退屈な絵葉書、USA』）を二〇〇〇年に、ドイツの本（『退屈な絵葉書』）を二〇〇一年に出版したとき、この企画は新たなレベルに達し

た。よりいっそう巨大な高速道路、料金所、空港、国境検問所、高層アパート、誰もいないスイミングプール、郊外の分譲地などが、気の抜けた絵葉書群のなかに加わったのだ。こうした本のページ、特に『退屈な絵葉書、USA』をめくっていると、ナボコフが『ロリータ』（一九五五年）で描いた自動車旅行の視覚的なイメージが浮かび上がる。ネオンの点いた路傍の食堂、食料品のチェーン店、ハンバーガー・スタンド、ガソリンスタンド、モーターなどをハンバート・ハンバートが苦々しげに列挙していくのは、戦後のアメリカとその空虚で氣力を奪うような繁栄に対して、募りつつある批判にもなっていた。パーはそれほど批判的ではない。ここでも彼のコレクションには、称賛するような雰囲気を感じられるが、悲しみも帯びている。最高に楽しんでいよう、君もここにいてくれたらいいのに！ いや、本当にここにいてくれたらうと思うんだ。だって、君なしでここにいるのは、完全な自分ではないってことだから。

絵葉書はすでに長いこと存在しているが、熱狂的に流行した一つの時期は一世紀ほど前のことだった。リトグラフによる旅先の風景の絵葉書を、あとに残した家族や友人に送ることが大ブームになったのだ。この短い流行のあいだの絵葉書で私が最も気に入っているものの一つは、ニューヨークのウルワースビルの絵葉書（一九一二年）である。これを私はニューハンブシャー州の納屋で数年前に見つけた。くねくねとした万年筆のインクが、聳え立つ建物の頂点を指し示し、農場にいる人たちへの情報として「昨年の冬、ここにのぼった」と書いてある。初期

の絵葉書の色合い——薄めの色と漫画本のような印刷のクオリティ——でさえ、親しみ深さを感じさせる色調となる。艶々して光っている一九七〇年代以降のものが、一貫性を欠き、どこか違うと思えるほどだ。一方、人々が何百万枚もの安い絵葉書を送り合っているあいだ、安価で持ち運びのできる写真機が売り出され、アマチュアでも「本物の写真」が撮れるようになった。彼らはその産物をわずかな数だがプリントし、地域の人々と見せ合うこともした。まさに「工業の時代のインスタグラム」である。一九〇五年から一九一二年までのあいだに何百万もの絵葉書が作られ、送られたが、その多くはパリの写真集にあるものと同じく明らかに退屈だった。絵葉書の流行がピークに達した時期である*₂。

しかし絵葉書は単なる画像ではない。だからこそ、本書の内容を視覚的に補助するものとして、私は絵葉書を使ったのである（訳注・原著には資料として絵葉書が付されている）。絵葉書は自己を探す自己の物語を語る。そして、絵葉書は大きなシステム内部の要素である——都市や町や農場、郵便制度や印刷業、観光業や休日、そして家族や友人や仕事の同僚のシステム。画像は集団行動やコミュニケーション行動の広大なネットワークのなかで、個人的なシグナルの接続点を生み出す機会、あるいはツールなのだ。裏側に書かれているメッセージは同様に、絵葉書が送られたという事実の補足にすぎない。実際、日曜日のフリーマーケットをぶらついてみれば誰でも気づくように、多くの絵葉書にはメッセージが書かれておらず、宛て先だけであ

る。探し求めていた「つながり」こそが本当の運搬品なのだ。

本書は、私たちがそのような「つながり」を探し求めることについて、またそうした欲望のネットワークが内包する可能性や危険性について述べるものである。退屈な絵葉書は、いくつが重要な視点を与えてくれる。まず、退屈な絵葉書は実は退屈ではなく、ある力が働いているということ。我々は最初に陳腐な、あるいは味気のない画像を見て、それがどこか信じられないと思う。それから「退屈」の対極として画像を評価するようになる。古い郵便物からしばしば喚起されるノスタルジアの対極と言ってもいい。続いてアイロニカルな「二重化」の時間があり、以前の二つの考えを絶妙な緊張関係で維持する。おかしい？ そのとおり。悲しい？

これもそのとおり。魅力的？ もちろん。退屈な絵葉書はこのように視覚的な形で我々にヒントを与えてくれるのだ。「退屈」とは、より一般的にどのような機能するのか。あるいは、もっと正確に言えば、いかに我々は哲学的に興味深い形で「退屈」の真価を見極めるようになるか。その見極めの力を養うことが本書の主要な目的である。

ここに、私が「インターフェース」と呼ぶものに関わる第二の洞察がある。我々はテクノロジに支配された世界に住んでいるし、議論のなかで私がテクノロジの細かい部分にも焦点を当てることがあるので、インターフェースというとコンピュータ時代だけの特徴と考えがちだ。もっと悪いことに、インターフェースの概念を特定のプラットフォームやプログラムに限

定してしまふ傾向がある。私がこれからの議論で示すように、コンピュータのインターフェースでさえ、こうしたもの以上だ。それはユーザーを、ユーザーの経験を、特定のプログラムで過ごした時間内の触覚的な要素（スワイプ、クリック、サムタイプなど）でさえも包含する。もつと広げれば、後期資本主義の生活において働いている社会的、政治的、そして経済的要因のすべてを、インターフェースは包含するのである——我々の手のなかや机の上にあるデバイスを働かせている物質的な条件や蔓延する貧困化から、我々がインターフェースで過ごす時間を形作る心理的かつ精神的な条件まで。

さらに大きな条件においては、インターフェースは人間存在の非テクノロジー的要素の多くを表わすのにも適切な表現である。私が考えているのは、「閾値スレッショルド」（訳注…そもそものは「敷居、入り口」の意味）、「誘導ページドアーウェイ」、「窓ウインドーズ」、そして「通路パスウェイ」といった簡単なものだ。それらは仕事や家のさまざまなアフオーダンス（訳注…環境が動物の行為を直接引き出そうと提供している機能）を形作るのに不可欠である。また、私はインターアクションのより複雑な特徴——境界を定めたり、通過したり——もここに含めている。高速道路ターンパイク、出発ロビー、駐車場、そしてモーターの部屋といった、パーが「退屈」として分類するなかでも最も際立つものたち。これらは隙間にある空間であり、我々はどこかに向かう途中にとどまっただけで、完璧な自分たち自身であるとは言えない。その目的地を絵葉書はのは仄めかしはしても決して明示しない。「退屈」と

は動きが取れなくなること、その状態に対して苛立ちを感じることに、そしてそういう状態に二度とはまり込みたくないと同様に痛切に感じることに関わる。退屈な絵葉書は幸福そのものである退屈な光景を、少なくとも最初の一瞥いちべつでは、退屈なものとして表わすのである。

パーの本で最も広範囲にわたる例の一つは、鉄道駅で待たされているときの退屈に関するハイドゥッガーの名高い議論である。今日ならさしずめ空港かバスターミナルに目が向くだろう。退屈な時間が永遠かと思われるほど続き、それと闘うあらゆる努力によっても——無料のワイファイでネットとつながろうとも、小さなショッピングモールをぶらつくこうとも——退屈は決して充分には和らげられない。こうした気晴らしが刺激的になる可能性をすべて失ってしまうのは、我々がどこかよその場所に行くだけのためにそこにいるからだ。特に空港は、ネオリベラルの時代の鉄道駅と言ってよい。定義からすれば「どことも確定されないゾーン」、その文字どおりの意味で「ユートピア」(訳注: Utopia は nowhere を意味するラテン語から作られた言葉である)。何も起こらず、何もしようがない「どこでもない場所」である。努力は意味がなく、落胆は決してはるか彼方かなたの話ではない。空港に意味があるとすれば、我々がそこをあとにして旅立つこと^{*3}。同じことは、人生のあちこちに散在するホテルやモーテルについても言える——我々が夜を過ごすためだけに訪れる、名もない一時的な居室。こうした部屋も(その匿名性と同質性によって気を減入らせるが)インターフェースである。組織立っていて、居心地よくさえ

ある部屋を我々が使うのは、必ずどこかほかの場所に行く途中。こうした場所から送られ、こうした場所を表象している絵葉書は、その隙間にある退屈さを痛切に感じさせる。

ときにはホテルでの短い滞在が長く続いてしまう。アルフレッド・ヒッチコックの『サイコ』（一九六〇年）に登場するベイツ・モーターのシャワー室では、銀行強盗の儲けを持って逃亡中のマリオン・クレイン（ジャネット・リー）が、神経過敏なマザコン男、ノーマン・ベイツ（アンソニー・パーキンス）に切り刻まれる^{*4}。イーグルスの最大のヒット曲、「ホテル・カリフォルニア」（一九七六年）では、氷に冷やされたピンクのシャンパンを常備し、「メルセデスの歪み」という不気味な苦悩の漂う洒落た宿泊施設が登場し、そこはいつでも好きなときにチェックインできるが——ネタバレ注意！——決して立ち去ることはできない。ソーシャル・プラットフォームのデザインの批評家たちは、そのデザインに埋め込まれている「サイトから離れがたくなってしまふ」特徴を、「ホテル・カリフォルニア」効果という適切な命名をして批判する。これが、このあとに続く私の議論の中心的なターゲットだ^{*5}。我々は自分たちが使っているデバイスに騙されて、インターフェイスにはまり込んでしまふのである。

最も鮮烈な例は、トマス・マンの小説『魔の山』であろう。エンジニアを志望して勉強している若き学生、ハンス・カストルプは、三日だけ滞在するつもりで贅沢なサナトリウムを訪問し、最終的には魔法にかけられたように七年間をそこで過ごしてしまふ。サナトリウムがある

山の澄んだ空気が結核の治療に役立つとされているのに、彼自身は結核に罹^{かか}っているわけではない。日々が過ぎていくにつれ、カストルプは正確に言えば退屈するわけではないが、山のつぺんでの彼の時間はどこか退屈である——満ち足りた怠惰が何も生み出さないと一般的な意味で。どうして彼は何かできないのだろうか？ マンが示しているのは、時間自体が我々の気分や状態に従って広がったり縮まったりする、ということだ。結局のところ、七年間とは何だろう？ カストルプは、一時的な住居という隙間の空間が自分の永続的な状態にびったり合っていると気づく。ほかの人々だったら、まさに同じ外的状態によって正気を失ってしまうかもしれない。

しかし、永続的に閉じこもることが危険であるホテルがさらにあり、それは哲学書を書くという仕事にまさに関わっている。一九六二年、ハンガリーのマルクス主義哲学者、ジェルジ・ルカーチは、*グランド・ホテル*《深淵》というイメージを使い、終身在職権を得てぬくぬくと怠惰に暮らす仲間の理論家たちを批判した。「指導的ドイツのインテリゲンチヤの大半は、アドルノも含めて、*グランド・ホテル*《深淵》に居を変えた」とルカーチは書いている。「それは——シヨーペンハウアー批判に際して私が書いたように——*深淵*のふち、無、意味欠如のふちに立つ、美的で、あらゆる快適さを備えた、ホテルなのだ。そして快適に味わう食事の合い間、それとも芸術鑑賞の合い間に、この深淵を日々眺めるならば、かかる洗練された

快適さの歡樂はひときわ高まろうというものである^{*6}。我々は快適さのなかに自分を見失ってしまう、とルカーチは示唆している。自分たちは厳しい批評の仕事に従事しているのだと自分を、そして他人たちをごまかそうとしていても。アドルノに関して私はルカーチよりもかなり寛大な見方をするだろうが、主たる議論はもつともである。哲学の存在価値は、マルクスの有名な言葉どおり、世界を変えることであり、単に解釈することではない。

私はこれからの議論で、その種の哲学のささやかな例を示していけたらと望んでいるわけだが、その前に一つの偶然について言及しておく価値があるだろう。トマス・マンはルカーチの好きな作家だったし、その膨大な文学批評のなかで擁護されている。実のところ、ハンガリーの哲学者であるルカーチは、『魔の山』に登場するレオ・ナフタのモデルであると言われている。カストルプの知的世界を支配する、ユダヤ系でカトリック教徒の厳格なマルクス主義知識人である。彼は快樂主義の人文学者、ルイージ・セテムブリーニとひっきりなしに議論している（ナフタはこのイタリア人と決闘し、死ぬことになる）。とはいえ、ナフタはルカーチよりもはるかに氣楽でシニカルだ——ルカーチはナジ・イムレの反ソ連政府に閣僚として一九五六年に加わり、その結果、処刑の恐怖に晒されて、ルーミアニアに亡命しなければならなかった。

そして最後に、気分^{ムード}についてひと言。あらゆる書き物が気分^{ムード}を伝えていると私には思われる。そして、書き進むにつれ、それが変わっていく場合もある。ハイデッガーが指摘するように、

気分ムードは単なる心理的な状態や感情の一種ではない。気分ムードは我々がこの世界にどう自分たちを見出すか、どのように生き、暮らしているかを表わしている。キそれは人間が世界をいかに捉えるかの根本的な部分なのだ。だから私は常に何らかの気分ムードに包まれている。気分ムードは我々が見る世界を条件づけ、反映している——我々がいかに自分たち自身と世界とに折り合いをつけているか。それは人間の存在に、我々の存在と展望の理解に、不可欠である。そこで私は、これからの四つのセクションのそれぞれで、支配的な気分ムードについての近況をアップデートすることにした。こうしたアップデートは読者にとって啓発的かもしれないし、そうではないかもしれない。しかし、いかなる本も気分ムードがその成立条件の一つなのだから、それを読者と共有しようという精神から、ここに掲げることにする——特に学問の世界の書き物においては、気分ムードの条件の重要性があまりにも頻繁に否定され、遮断されているので。本は結局のところ人間によって書かれている。少なくとも、そのほとんどは……。

解説

小島和男

まず、キングウエルが本書のなかでしている現状の把握は、特段の独自性のあるものではない。私はキングウエルのこの論考における現状の把握の価値を低く見たいわけではない。むしろその逆である。その現状の把握はおそらく妥当なものだ。ポスト・トゥルースの影響をガツンと受けている人はこう言うかもしれない。それは、多様な価値観のあるこの世界のなかで少数の、もしくはただ一人の心配性で悲観的で皆を怖がらせたいだけの意見にすぎない、と。でもそんなことはない。同じような現状の把握を、ネットフリックスのドキュメンタリー映画「監視資本主義…デジタル社会がもたらす光と影」(原題:『The Social Dilemma』)も語っているし、本書と同じ新書で、少し先立ってこの夏に出版された『全体主義の克服』でその著者マルクス・ガブリエルも「デジタル全体主義」という言葉

を使って指摘している。

曰く、SNSが過度に発達した現代において、私たちは気づかぬままに企業に自分を商品として差し出してしまっており、自分を見失っている。具体的に言えば、アマゾンやグーグルやツイッター、フェイスブックを私たちはタダで利用し、快適な生活に役立てているように感じているが、しかしその実、私たちはその企業にたくさんの情報を差し出し、企業はそれを利用し広告を通じて儲けている。その企業が私たちの見る画面に表示する情報は、より企業の収益が上がるように私たちの行動を絶え間なく操作するようになる。すぐく単純化すると、私たちは見たいものしか見ないから、見たくないものは表示されないようになっていく、ということだ。とすると、お金を使う方向にどんどん進んでいくだけでなく、多様なものを見ることができなくなっていく、どんどん偏っていく。そのような状況である。

キングウエルのこの論考の優れた点、哲学に少しでも好意を持つ者なら必然的にこの論考にも興味を抱かざるを得ない点は、そういった状況の分析を「退屈の哲学」をもとに考えたことだ。私が考えるに、それはうまくいっている。なぜなら現状、先のような状況を

説明しても、それだけでは相手によってはこう言われてしまうかもしれないからだ。つまり、本質が扇情主義に埋もれてしまっている。繊細でない歪んだ見方をしている。一部の人がただだけの見解に依拠して語っている、と。実際こうした言葉でフェイスブックは先に紹介した映画を公式サイトで大々的に批判した。歪んだ状況を見て歪んでいると言うと、お前の見方が歪んでいると言われる、綺麗な図式の地獄がここに見て取れる。もちろん、キングウエルに対してもそうした批判は可能かもしれない。しかし、それに対してキングウエルはこう言うだろう。問題はもっと根本的だ。インターフェースのなかをさまようことで人々はその人自身ではなくなっているのだ。そこが問題だ。人々がインターフェース上に長い時間いるという事実は、君も共有するだろう？ いやむしろ、いてほしいの难道？ と。

キングウエルの言う「インターフェース」とは、差し当たり、ウェブ上のSNS空間のことだと思っただいてよいだろう（端的にはコンテンツではないもの、つまりなんらかの内容ではないものと思ってくれてもよいかもしれない。ネット上で自分でコンテンツを調べて、たとえば論文やら新聞記事を読んでいる場合は、あまり当てはまらない場合もあるからだ。しかし、

それでも「場合もある」と限定するのは、検索エンジンを使ったり、SNSで情報を得てコンテンツに行き当たる場合がほとんどだからだ。そこでも我々は、インターフェースとは不可避につながってしまっている。それらは連続していて、非常に分けがたく、厄介だ。

それは、無料で誰にでも使えるという点で入り口のように開けていて、そこからどこへも行けないという意味で入り口にすぎない。ただの接続地点である。どこから来てどこへ行くのかわからないその中間地点である。そこで私たちはどこにも行けないどころか、自分を商品として差し出し、ゾンビ化する。「私は混乱し、落ち着かず、刺激を受けすぎている。関心をあちこちに向けることで自己をすり減らしている。私はゾンビであり、幽霊であり、私の快適さと娯楽のためのものとされているテクノロジと資本の大きな枠組みのなかで、宙ぶらりんになっている。そして、それでも、それでも……身の置き所がないように感じている」。

そこにいられたらいいのに、そのままの自分でもできないのである。「ここにいられたらいいのに」が本書の原題である。ここに自分ができることができないなあ、という話だ。ここに自分はいない。差し出してしまっているから。インターフェースのな

かで、本来の自己に立ち返るために必要な退屈は搾取され、私たちは本来の自己としては存在できないのである。

「本来の自己」、「本来の自己に立ち返るために必要な退屈」という言葉が出てきたところで、まさにその「退屈の哲学」について考えてみたい。キングウエルが、立脚しているところの「退屈の哲学」についてである。退屈に関する哲学的説明においてキングウエルは、シヨーペンハウアー、キルケゴール、ハイデッガーを挙げるが、ここではパスカルから考えてみたい。おそらくそれが、いろいろ説明しやすいからだ。

パスカルは私たちのいるこの世界を「広漠たる中間」と呼ぶ。世界について私たちは完全に知ることができなければ、まったく知らないでいることもできない。どこから来てどこへ行くのかもわからない。究極的な目的は知れず、ただ生まれ死んでいく。そのようななかで私たちは何かをせずにはいられない。その「何かをする」行為が「気晴らし」である。気晴らしは、そのうちどうしたって死んでしまうという悲惨な運命から目を逸らすのにも役立つ。我を忘れて熱中できる何か、それが気晴らしである。この場合、仕事でも戦争でもあらゆる私たちの行動は気晴らしとなり得る。気晴らしにより不安は一時掻き消さ

れるが、いつまでもそれに没頭していられるわけではない。この広漠たる中間のなかでただふわふわと死に向かって漂っているだけだという状況は変わらないからである。とすると必然的に、徐々に気晴らしも無意味なものに思えてきて、虚しさを感じるようになるだろう。そこで私たちが陥るのが「倦怠」である。倦怠に陥ると辛く不安になるので、また気晴らしをするようになり、いつまでもそれに没頭はできず……というように、「気晴らし↓虚しさ↓倦怠↓気晴らし↓虚しさ↓倦怠↓……」という無限ループを続けるようになる。私たちはこういった状況で生きているのだとパスカルは解くわけである。実際のところ、パスカルの思想の肝はその先の「パスカルの賭け」にあるわけだがここではおいておこう。

なお、そもそもこのアンニユイという言葉はフランス語で、訳語として「退屈」も当てはまる。そして、本書の表題の「退屈」は英語で *boredom* なのだが、そのフランス語訳としては一番にこのアンニユイがあると行ってよいだろう。「アンニユイ」という言葉は日本語としても普通に使うが、アンニユイと退屈は日本語では少し違うニュアンスになる。ただし、英語の *boredom* は、つまり本書での「退屈」は、日本語で「暇でやることにな

くて退屈だなあ」と言うときの「退屈」というだけでなく、こうした「アンニユイ」という言葉で私たちが使う意味が含まれていることに注意してほしい。倦怠感や「なんだかなあ」という気持ちも含まれているということである。

このような退屈が、「なんだかなあ」という嘆息が、実は大切なのである。このような退屈は、キングドウェルがおそらく気に入っているであろうハイデッガーも指摘するように、私たちを哲学へと導くからである。このような退屈に陥っているとき、人間は何をやっても虚しいと感じている。何をやっても意味がないと感じている。なぜなら、どうせ結局は死んでしまうからだ。最終的には死んでしまうから人生に意味がない、というのは実は論理的な誤りを含んでおり正しくないが、「意味」は人生に付随していたものであり、何かがなくするとき、それに付随していたものが過去にさかのぼってなかったことになるなんてことはないから、ほとんどの人がそのように思うというのは事実だろう。

そして人生に「なんだかなあ」と思うその瞬間、どうしたって私たちは自分の存在について考え、それがなくなるそのときである「死」を、どうしたって意識する。意識できないならそれは本当の「なんだかなあ」ではないのだろう。ちなみにそのためにも「なんだ

かなあ」は人生全体に対する倦怠感でありアンニュイであることが望ましい。もちろん、個々の限定的な「なんだかなあ」も人生全体に対する「なんだかなあ」につながるわけではないが。いや、つなげましょう。ともあれ、そうやって「死」を意識した我々は、そこで日常に埋没していたいままでの自分を客観的に見ることができる。「私ってなんだ？」。そう思う「私」が、死を意識し、自分の生き方を正面から考えられるようになる瞬間がそこに出てくるのである。

つまり私たちは「退屈」によって「死」を意識し、死に向かう存在としての自分を改めてしっかり意識するようになるということである。そのとき、私たちはその都度の気晴らしに、何らかの意味のない欲求に縛られておらず自由に思考することができる。それが本来的な、本当の自分であるということだ。

しかし、現代の私たちが感じている「退屈」は、それをキングウエルは「ネオリベラル的退屈」と名づけているが、「熱狂的な自己消費につながる形で閉じ込められ、潜在的に依存している」状態にほかならない。まさに熱狂的で絶え間ない刺激、自分を動かし続ける絶え間ない刺激のなかで、本当の自分に立ち戻ることにつながるような「退屈」は「ネ

オリベラル的退屈」に取って代わられている。現代の関心経済や記号資本主義における企業は、ある意味、私たちにとって大事な「退屈」を搾取し続けているのである。「人々にコミュニティ構築の力を提供し、世界のつながりを密にする（フェイスブックのミッション声明）」はずのフェイスブックが、本当の自分に戻る機会を奪っているのは非常にまずいことではないですか？ そこに本当の自分のいないコミュニティってどうなんでしょうか？ その構築の力を提供するって言ってますけど、その提供する相手をいなくしているのですよ。これにはどう言いますか、ザッカーバーグさん!?

まあザッカーバーグ氏がこの本を読んでコメントを出すなんてことは、可能性としてはないことはないかもしれないが（彼の妹はソーシャルメディア批判もする優秀な学者だし……）、まあないだろう。とすると、私たちはこの状況に自分たちでどう対処していったらよいだろうか。それにはキングウエルはこう答えてくれている。コンテキスト主義をとり、足場を組もう。

もちろん、「『オルタナティブ・ファクト』とポスト・トゥルースに基づく確信——つまり、根拠なき確信——の時代に、我々は真実を規準にしなければならないことを改めて心

に刻み、あらゆる形で浸透するインターフェースの影響に対抗しなければならぬ」のは事実である。しかし、それに従来の「哲学的な批判」が役に立つかという点、役に立たない点とキングウエルは思っている。彼の語るコンテキスト主義では、「真実が常にコンテキスト次第」で「主張の妥当性は所与の解釈の枠組みまたは方法によって決定され、それが生む真実の主張は所与の言説内部で妥当と見なされる」とされる。これは相対主義でも客観主義でもない。相対主義でないのは、異なるコンテキスト間の矛盾は認めているからだ。どれもそれぞれのコンテキストにとっては真実だとするのではなく、そうはつきりとキングウエルは言っているわけではないが、どれも間違っていると考えると書いてもいまいだろう。真実は、（どこかにはあつてよいのだが）この世界には、差し当たらないと考えるのである。あるのは流れ、文脈（コンテキスト）だ。「我々が真剣に受け止めなければならぬ考えは、事柄の事実といったものはないということ」なのである。

さて、そのような状況下で私たちにできること、それは「足場組み」である。キングウエルは「理性の規則に理論的に加担してきた」哲学者としては当然辛がりつつ、こう言う。「我々が公共の議論で必要としているのは、理解しようともっと努力することでは絶対に

ない。理性的な公共の空間というユートピアは幻想だ。それを掘り出すようにと熱心に説くことは（中略）無駄である」。そう認識した上で「足場組み」をすべきだと彼は言うのである。その私たちが組むべき「足場」とはいったい何か？ それは、端的にはSNSなどのメディアを離れて瞑想や運動をすることが挙げられている。そうするなかでの「ネオリベラル的退屈」も哲学的思索に向かう契機になるかもしれない。さらに、公共空間で私たちがすべき「足場組み」は、まずは理性の限界を認めることのようにだ。理詰めで人の精神は変えられない。理性の力には限界があるのである。「そして、規則であれほかの形であれ、言葉に対する制限をいっさい設けず、公共の場で自由に討論することが理性へとつながるといった想像はやめよう。言葉に対する制限と議論に関する厳格な規則——話の腰を折らない、スローガンを述べない、一方的に有利な事実を並べないなど」を作ること、それが必要だとキングウェルは説く。そして会話を減らし、離れて暮らし、「無理に友人であろうとしないこと」が肝要なのである。

なお、大事なのは、真実はどこにもなさそうで、「すべてが解釈だと言ってもいい」が、「知と信念に規範があるという考えを放棄」はしていないという点だ。「インターフェース

からの絶え間ない刺激は、絶え間ない哲学的批評の取り組みによってのみ対抗できる。これが、ネオリベラル的退屈が哲学的退屈に変わるとき、光を当てられる重要な洞察なのである」とキングヴェルは語るし、「ただ、絶えず批判の目を凝らす——自分に対して、自己の足場となる構造に対しても——という企てが、我々にできる最善策だと考える。哲学とは、こういう企てのことだと私は理解している」とも語っているように、個人個人は彼の言う哲学によって現代の状況から抜け出せると、彼は考えている。だとすると、哲学をすることも「足場組み」の一貫と言えるのかもしれない。哲学をするために「足場組み」をすべきなのだと行ってよいだろう。

さて、本書の内容は私の愚見では以上のようなものだが、ここで私は次のような地獄を想像して、そこにキングヴェルの現状への対抗策を投入するとどうなるかを考えてみたい。なお、あくまで想像で現実にあるかどうかは知らない。それはこんな地獄だ。

ある母集団のなかにAという集団とBという集団がいるとする。実際そこにおけるAとBはそんなはつきりと分けられるものではなく、AとBのあいだの差異はグラデーションでそんなにはつきりと分けられるようなものでもないのだが、そのことは母集団のほとん

どの人々にあまり認識されてはいない。それは、しっかり認識されれば以下で述べるような問題はそもそも生じないかもしれない重要な事実なのだけれども。そのようななかでAはずっとBから差別され、ひどい攻撃を受けてきている。何年も前から、ずっと。その理由や起源がもうわからなくなっているくらい前からずっとである。そのようななかでそれはおかしいと誰かが理性の声をあげたとしよう。「Aが差別を受けているのはおかしい、傷ついたAの手当てをし、平等へと進めなければならぬ」と。それに対して「そのような事実はない」とか「Bの権利を侵してまでAの手当てはすべきではない」という意見を言う人々があつたりするだろう。そこで理性の声はなんと言うだろうか？ たえば、「そういうことを言うな、事実をきちんと認識しろ」と言ったとしよう。そうすると返ってくる言葉はこうだろう。「私たちが私たちの考えを言うことは自由なはずだ。私たちは君たちが考えているような事実はないと認識しているし、そんななかでAの手当てこそ平等を阻むものだと考えている」。

それに対して、理性の声は理性の声なりに（笑）たくさんのお事実を誠実に提示したとしよう。するとこう返ってくるだろう。「君たちに提示された情報は偏っている。Aが差別

を受けていると私たちに思わせたい君たちの提示する情報が偏っていないわけではないか」。その母集団の人々はみんな信じたいことを信じるし、その人々のうちのそれぞれが生きているうちに何に出会ってどう影響されるかは、その人には基本的にはコントロールできない。端的に言えば、親を選べないという事実がそうだ。特に子供のうちは教師だって自分では選べない。

このように自分が好きに決めたわけでもない要因に形成されてきた自分の傾向性に、人は固執しがちである。自分の持っている既存の信念は、それがどんなに理性的論理的に、そして穏やかに、間違っていることを指摘されようと、手放したくない。そんな指摘は不快である。そしてその持つてしまった傾向性を「シェア」する仲間はずっと指摘しない。「シェア」する方法もたくさんあるのだ。仲間たちはそれを間違っているなんて指摘しない。実際不当な扱いを受けているのはBのほうだし、地球は丸くなんかないし、トランプは英雄だし、モリカケ問題はたいした問題ではないし、選択的夫婦別姓は絆を弱めるからよくないんだって「みんな」言ってる。ああ、なんて仲間たちは素敵きずななんだろう。仲間っていいな。トモダチや仲間の大切さは子供時代から漫画やアニメで教わっている。真実な

んで人それぞれなんだから、それよりもトモダチを大事にしなきゃ。マトモな人たちとのいつものつながりは素晴らしい！

こんな地獄のような事態があったら嫌だな、本当に地獄だなと思う。そのような事態のなかに確かに「理性的な公共の空間というユートピア」は露ほども想像できそうにない。キングウエルの現状の把握と似ている。しかし、ちょっと、いや、ものすごく違う点がある。それは、「AはずっとBから差別され、ひどい攻撃を受けてきている」という点である。もちろん、この場合にも「足場組み」は役に立つだろう。特に「言葉に対する制限」は重要だ。言葉は直接の差別や侮辱につながるからだ。しかし、どうだろう？ お互いの会話を減らし離れて暮らしたところで、攻撃によって受けた傷は癒えない。反省し謝ってくれたからといって傷が癒えることはないのだが、なんだかもやしないだろうか。理性的な公共の空間がユートピアだというように、まさしく存在しないと考えることは、やられたら逃げるしかないということを暗に含んではいけないだろうか？ 確かに、「AはずっとBから差別され、ひどい攻撃を受けてきている」というのも一つのコンテキストだと言えるかもしれない。しかし、そのコンテキストのなかで傷つけられた人は、コンテクス

ト主義をとり、極端な話をすれば、諦めなければならぬのだろうか？

勝手な状況を想像して批判するのはよろしくないという向きもある。また真の賢者に
なればそのような差別や攻撃は、ほかのとあるコンテクスト上で起こっていることだと見
なし、気にしないことが可能だという理屈もあるかもしれない。しかし、会話を減らして
足場を組み、個人個人で哲学をしようという主張は、確かに正しく、私はとても気に入っ
ているが、万が一、Aのような人々がいたらそれは救われないんじゃないかなとも思っ
てしまうのである。

とはいえ、この困難な現代の状況下でのキングウエルの指摘は至極真つ当で、非常に役
に立つものである。個人個人が自己を取り戻さなければならぬということ、自己を取り
戻し、本当に生きるためにはどうしたらいいかということを書き本は教えてくれている。そ
して、これもまた非常に愚かしい楽観的な見方だが、そのような実践をする人が多くなれ
ば、なるほどAが救われるというのもありそうなことだと思う。ティンダーで出会って幸
せな家庭を築いている方は多少気を悪くされるかもしれないが、それでもいつでも誰に
も、足場を組んで哲学的思索に向かう道は開けていると思う。そのような人が少しでも増

えてほしいなと思いつつ、本書をツイッターで宣伝することにちよつと躊躇ちゆうちよしてしまっ
ているいまの「私」がここにいます。